別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	孫　　瑾
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)

鬼神病因論と呪術治療からみる中国古代文化
―「鬼交」を例として―

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)　教授　有馬卓也

審 査 委 員 (Name of the Committee Member)　教授　末永高康

審 査 委 員 (Name of the Committee Member)　教授　川島優子

審 査 委 員 (Name of the Committee Member)　招聘研究教授　大形　徹（立命館大学）

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は，「鬼交」という病気の病因・病症，そして治療法を，医学思想と民俗文化という二つの視点から論述しようとする意欲作である。

本論文は，序論，第一章「医と巫の混同（漢～六朝・隋）」，第二章「「鬼交」解釈に対する医学界の試み（六朝～唐）」，第三章「民間の理解と民間治療（宋代）」，第四章「シャーマンとの関わり（現代）」，終章より構成される。

第一章においては，後漢から六朝・隋の間，即ち伝統医学が成立した初期の「鬼交」解釈について，鬼神病因論と医学理論が共存し，呪術と医術治療が併存していた様相を示す。まず「鬼交」という病名が誕生する以前の『黄帝内経』ではそれが「狂」というカテゴリーに分類され，基本的には精神疾患の一種であることを示す。次に「鬼交」の「鬼」と「交」とがそれぞれどのような意味合いであるかを論じ，その病因解釈に鬼神病因論と気の医学理論とが混在していることを明らかにする。また「交」とは鬼気と患者の気との交わりであり，「鬼交」とは人間の場に侵入した鬼気が人間自身の気と交わった病気であることを示した。さらに「鬼交」の治療に含まれる呪術要素の意味を解析する。

続く第二章では，六朝から唐に至る医家の「鬼交」解釈を考察する。まず「鬼交」が伝染性の病気を意味する注病に関連付けられるようになった背景を明らかにし，それが根治できず再発する病気をも指すようになったことを論ずる。次に「注」や「伝尸」などを説明し，「鬼交」が注病に結び付けられるようになった経緯を明確にする。また，当時の社会においては，病気に対する知識が不足していたことから，伝統医学が文化的要素と強く絡み合っていたことも明らかにした。加えて六朝の房中家の「鬼交」説では「鬼交」の病症が患者と鬼との交合によるものと解釈されていたことを示した。

そして第三章において，『夷堅志』に記されている民間の「鬼交」関係の事例を扱い，民俗医療における「鬼交」の病症の男女差，その治療法に道教系治療，城隍・土地神の信仰に関わる治癒，仏教系治療，漢方医による治療，民衆自らの治療行為等の用例を考察する。

最後の第四章においては，現存する「鬼交」の呪術治療に対するフィールドワークに基づいて得られた結果を，伝世文献を中心に論じてきた成果と比較検討する。まず江蘇省中部沿海蹲門村の「鬼交」に対する病因解釈及び治療行為について論じ，次に「鬼交」の患者が巫女となるという現象を，エリアーデなどの先行研究に論じられている成巫の兆候や巫の特徴と比較し，「鬼交」が成巫の契機や巫の能力と見なされていることを示した。

終章では本研究の総括を行うとともに，今後の課題について論じる。

本論文は，「鬼交」が細いながらも一本の糸でつながって，古代から現代に至っていることを，呪術・医学・宗教・文学等の文献やフィールドワークから得られた知見に基づいて論じた学際的研究である。特に医学の進歩と文化の変容にも目配りしつつ，鬼交の解釈の変遷をたどっている点は特筆に値する。論証や論の展開にやや荒削りな部分は残すが，今後の学界に裨益する所は大きい。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)